

# 続「妹尾義郎」ノート（資料）

中 濃 教 篤

ここに生前妹尾先生から筆者があづかった文章の一つと死期を予想してテープに吹き込んだいわゆる「遺言」（いづれも未発表のもの）を紹介し、日蓮集團の近代史研究の一助に資したいと思う。とくに戦後の妹尾先生の心境や活動を知るうえで重要な資料である。

## おとむらいの言葉

私は日中友好協会とアジア・太平洋地域平和連絡会を代表して、一言、しかし心からなるおとむらいの言葉を申し上げます。

日中友好協会は、あなた方の祖国、新中国と日本との友好親善を深め、文化の交流を高めて両国の発展と繁栄をはかり、ひいてはアジア及び世界の平和に貢献すべく努力しておる団体であります。又平和連絡会は昨年の秋、アジア太平洋地域十六億の民族の代表四百数十名が、北京に集っ

て開催した平和大会に、日本の代表派遣のために結成された連絡機関で、今日も引きつづき世界平和運動の連絡機関として努力をつづけておる団体であります。さて皆さん、私は今次戦争の犠牲者として白骨と化し、異国の峰や沢に八年もの長い歳月を冷い風雨にさらされた六十五体の皆さんの前に立って、今更のように戦争の許しえない罪悪性と恐ろしい惨禍とを痛感して、真に感慨無量のものがあります。私のごとき一どは反戦平和の運動に挺身しながら、荒れ狂う日本帝國主義の侵略戦争を防止することができず、弾圧され投獄されて、遂に彼等の前に口をつむいだ附甲斐なかつた自分の過去を省みて、且つは恥じ且つは懺悔と謝罪の念で胸一ぱいの只今であります。

皆さん、七月七日は日本帝國主義が中国侵略のきっかけとして策謀した蘆溝橋事件の血の記念日です。奇縁というか、十七年後のその日、私たちは秋田県花岡鉦山等で、日

本軍国主義者の兇刃にたおれた皆さんとおなじ中国人俘虜殉難烈士の遺骨五百六十体を捧じて、天津市新港の波止場におわびの上陸をしたのでした。あくる七月八日、天津で盛大に営まれた追悼会で殉難者の遺家族や、かろうじて虎口をのがれて中国に帰られた生存者の方々が、当時の惨虐さの生々しい事実を語られて、無限の悲しみと憤りの声をもらされた時、私もまたその当時、栄養失調でなくなったいわば戦争犠牲者である私の長女（妹尾妙子——筆者）の悲しい最後や、広島原爆におそわれて黒血を吐いて狂い死にした私の甥の、むごたらしい死にざまを想い出して、ともにともに暴虐きわまる帝国主義者、軍国主義者の罪惡に対して、もえあがる憎しみと憤りを禁ずることができませんでした。

皆さん、私は今はっきりと思います。皆さんのごとき戦争犠牲者を用い、皆さんのごとき盡を慰め、そして声なき痛ましい皆さんの死に永遠の意義あらしめる唯だ一つの道は何か、それこそ今後かかる戦争を絶滅すべくからだを張って反対し、永恒の平和を守りぬく、その運動のみである。読経も焼香も花輪も弔詞も、この決意をかたく懐いてこそ意味があるのであって、もしそうでないならば、それは一片の虚礼であり、一時の感傷に過ぎないのだと私は思

います。

そもそも一人の人を殺しても、それは殺人罪にとわれるのです。それを自国の利益のために他国を侵略して無数の大衆を殺戮する帝国主義戦争が、どうして是認されてよいでしょう。一つの物を盗んでも、それは窃盗罪にとわれるものを、他民族の領土を侵略し占領する帝国主義戦争が、何で讚美にあたいする愛国的行動として許されうるでしょう。所詮このような戦争の結果は、昔も今もおなじことです。「一将功成つて万骨枯る」という詩句のごとく、少数支配階級の権勢と榮華を持続するために、大衆が犠牲に供せられる以外の何ものでもありません。

然るに皆さん、日本の現状をはっきりと見て下さい。一連の反動的支配階級は、戦後、恥しらずにも米帝国主義の傀儡となり、平和を愛好してやまない皆さんの新中国を反って侵略国として疎外し、これに対する防衛という口実のもとに、国民をあざむいて再軍備に狂奔しつつあります。無自覚なる国民もまた喉元すぎて熱さを忘れたものか次期の戦争は原爆水爆による全世界破壊のそれにつながることも考慮しないで、たあいもなく戦争につながることに協力してあやしまないという始末なのであります。

何という無自覚さでしょう。何という愚かしい現状であ

りましょう。

しかし皆さん聞いて下さい。そして喜んで下さい。かかる際にも平和を愛好する民主的同志や団体は、民族的連帯責任を感じて、衷心から懺悔し、皆さんに対する慰霊祭も行い、そして日中朝の友好と理解と協力によって、アジア不戦の平和運動を真剣にすすめておりますことを。

私は幸いにも、この三月には中国から帰国する同胞の迎えに白竜丸で、七月には遺骨送還の黒潮丸で二回も皆さんの祖国、はたらく者のゆたかに恵まれておる新中国に使用することができました。そしてこの目で新しく中国に躍動する平和の姿を見、この耳で全中国にこだまする平和の声を聞いて帰りました。それは真実に社会主義を目ざす國の当然の姿であります。

皆さんが、生きてこのような祖国にお帰りになれないことを、心から痛ましく思いますが、さもあれ、皆さんの御遺骨も遠からずなつかしの祖国のふところにつつされるわけであります。そして皆さんの祖国は花岡殉難烈士の遺骨のときとおなじように皆さんを抗日烈士として手厚く迎え不朽の英雄として讃歎することでありましょう。皆さんの痛ましい死は、このようにして決して犬死ではありません。それこそ輝かしい中華人民共和国建設にとつての貴い

礎となつております。

皆さんどうぞ運命を大観して、永遠に安らげ、新中国の平和の森から、日中友好のくさびとして日本における私共の平和運動を見守って下さい。そして励まして下さい。

私どもは今後ますます日中朝友好の道を前進します。拡大します。また一方平和連絡会を活用して、「平和は話合いで」のスローガンに従い、平和世界建設への先駆的使命を果してゆくことをここにお願いいたします。

皆さん、私の言葉は貧しいが、八年も浮かばれなかった皆さんを弔う私の真心をおうけ下さい。

一九五三年九月十四日

日中友好協会と平和連絡会代表

妹 尾 義 郎

(註) この文章(弔詞)には妹尾義郎の人間性、戦争反省が非常によくにじみ出ているように考える。また妹尾の名講演の調子がそのまま文章化されているようにも思えるがここでふれられている「三月には白竜丸で、七月には黒潮丸で」というのはつぎのようなことである。三月うんぬんは一九五三年三月五日に日本側日本赤十字社の島津忠承、高良とみ、平野義太郎、内山完造らと中国側中国紅十字会の廖承志、伍雲甫らによって北京で結ばれた「日本人居留

民の帰国援助問題の協議に関する公報」のなかの「二、帰国を希望する日本人居留民の第一回分の集結完了ならびに乗船開始の期限を一九五三年三月十五日から三月二十日までと定め、日本側の船舶は、この定められた期間内に、以上の三港に到着するものとする。」という項目にもとづき、

平和連絡会の代表として中国へ趣いたことである。また七月というのは、戦争中、東条内閣の「華人労働者内地移入ニ関スル件」という閣議決定にもとづき、関東軍が山東省を中心に、農民をはじめ手あたりしだい中国人を捕え、日本国内に強制的に連行し、炭坑、鉱山などで約四万人を強制労働につけ、そのうち約七千人を虐殺したという事件のあと始末（戦争反省）であるそれらの遺骨を中国へ返還する運動の一環として、一九五三年七月七日黒潮丸（四八〇トン）で天津に到着したことである。これが中国人殉難者の遺骨送還の最初であった。またこの時はじめて北京で中国仏教協会副会長趙樸初と面会することができ、いろいろ日中両国の仏教交流の端緒が開けた。

なおこの弔詞は、遺骨送還の第三次代表団が日本を出発する前に浜松市で催された慰霊祭で読まれたものである。当日の主催は静岡県中国人俘虜殉難者慰霊実行委員会で、三十八団体、代表二百名が参加した。

親愛なる同志の皆さんよ、またたいへんにお世話になった親友の皆さんよ、

まだ、今日明日という訳でもありませんけれども、療養所を退所してふりかえりますところ、だんだんと病勢が悪化の一途をたどって、それにかつてやったこともない肝臓が悪くなりましたりして、非常に衰弱の度が増して、今体重が十貫目を割ったようなことで歩行がなかなか困難です。

そんなようなことで、今度ばかりはもう、税の納め時じやないかしらんと、内心思うんですが、むろん、最後の最後まで、努力はいたしますけれども、たまたま今日、きのう長男の鉄太郎がテープレコーダーをもってきてくれましたので、それへ、もし同志の皆さんに話すことがありやいないかといってくれましたから、こりゃ幸いと一こと二言のようでありますけれども、皆さんにお礼の一ことを述べたいと思います。

七十一年のぼくの生涯は、なかなか波乱万丈で、有余曲折といったような面がありました。たどりたどって、やっと私は本当の科学的な内容のあるマルクス・レーニンの思想に信頼することができるようになってきました。むろ

ん、その信仰においては私は仏教の信仰、個人的な信仰、  
仏教をもっておりますけれども、社会をよくしていくと  
いう政治的な面において、ちょうど赤岩栄君がキリスト教  
の信仰をもちながら共産党に入っているように、これ以外  
には本当のよき社会はつくれないと、こんなように私は自  
覚するようになりました、ゆんべでしたか、創価学会の中  
信地区の責任者の若い人が二人きまして、私と議論をしま  
したが、彼らまず、五年后には全日本が南無妙法蓮華経を  
唱えるようになる、二十年后には全世界が南無妙法蓮華経  
を唱えるようになるなんて、まるで夢の夢の、ま、妄想を  
平気で信じておるんです。で、そのなる方法は、ていや、  
もうなんら科学性のないことをペラペラしゃべっていきま  
したが私も、ま、このこと思ってこっぴどく論ばくしときは  
しました。ところが、そのずっと前に、友達の、先輩の細  
川嘉六さんが手紙をくれまして、その手紙は中国の有名な  
画家の齊白石老画伯の絵の刷りこんだ、とても風雅な便箋  
にこまごまと綴った手紙でした。その中に細川さんが、妹  
尾君、なんとしてもぼくも病氣もしているし、年もとった  
が、うれしいことには、はっきりとこの地上に天国じゃな  
くて地上に極楽が建設される可能性を確信することができ  
るようになった。これは何よりもうれしい、我々はもう老

人だから一線にたつてずんずんできんようだけれどもが、  
この信念をもって日々是好日として長生きしてその日を待  
とうじゃないか、とこういうような一節もありましたが、  
私も同感で、創価学会の連中の妄想では、五年は、二十年  
はおろか百年たつたて地上にそんな極楽も何も出来はし  
ないけれども、今の事実からみれば、戦后、戦前わずか  
にソ連一国だったのが、戦后には十億の人々がもう共産主  
義になり、さらに近くは、小さい国だけれどもが、キュー  
バが社会主義の建設を理想しているように、もう着々とこ  
れは発展していくものだど確信できるんです。またそうせ  
ねば民衆が納得はしないので、またそうすることが最高の  
崇高な道義であると私たちは思うて、共産主義こそ最高の  
道義であり、最高の道義の内容には共産主義が発見できる  
と、ちょうど英国のヒューレット・ジョンソン僧正がソ連  
を賛美するような具合に、自覚めた宗教者が、当然ソ連を  
賛美するんだと思うんです。

私もどうやら、たどたどしい人生でしたが今日、共産運  
動の末席に加わって赤旗でつまれて死ぬるっていうこと  
は、私の最高の名譽のように考えている次第です。

みなさん方にことのほかお世話になってなんならむくい  
ることができない、本当に限りないお世話になりました。た

たとえば、東京におけるあいだ、中濃教篤君が中心に妹尾義郎の後援会を作つて多大の支持をしてもらいまた松本へくりやあ、ウルガ・ユキオ君が中心になつてこれ又多大の支持をしてもらつたりしてそれに何もむくいることができないで眠つていかにやなんのは悲しいことに、また恥かしいことにも思います、やむをえん今日の私です。

どうかそれを了として、この感謝の気持だけをくみとつておゆるしを願いたいと思うわけであります。

諸君たちの健康でますます強力な運動を展開されんことを切に切に祈りまして、私の「最後のことば」といやあおかしいですが、まだ、お目にかかる日もあらうと思ひますけれども、心に燃えてるおさえがたい感謝をのべて御挨拶を終りたいと思ひます。

ちようど一九六一年七月の十六日、やぶ入りの日ですが私は郷里は親元は広島県の東城といつてるところですが私の親元は民衆で民衆の中にやぶ入りするつもりで今日一日を過しましたが、本当にくれぐれも感謝いたします。皆さんもお大事に、達者でひとつ闘つて下さい。

(註)この遺言には、妹尾義郎が社会主義者となつて、社会主義社会の実現にどのような期待を寄せていたかがしめされている。妹尾がこうした思想に到達するには、戦前

における新興仏教青年同盟の運動が大きく影響したと見ることが出来る。ソ連や中国という社会主義国について、手放しの礼讃がなされていることには批判をもつ読者もあらうと思うが、中国については、いわゆる「文化大革命」以前の正常な中華人民共和国の現実に対するものであることに注意しておく必要がある。

なお「療養所を退所して」といわれているのは長野県城山療養所のこと、ここに長い間入院している頃も、その入院患者で結成されている「患者同盟」に参加し、これへの助言を行つたり、看護婦さんを教育したりして活動をつづけていた。

また「むろん、その信仰においては私は仏教の信仰、個人的な信仰、仏教をもつております」と述べているが、一応通仏教的信仰に立つてはいたが、唱題をし、法華経思想を説くなど、法華経信仰が軸となつていた。

ついで「ちようど赤岩栄君がキリスト教の信仰をもちながら共産党に入つていられるように」といわれているのは、明らかに妹尾の思い違いで、赤岩は一時期、共産党入党を決議したが、教団からの圧力で入党の決意をひるがえしたのが事実である。

ここで若い創価学会員が妹尾の折伏にやつてきたのをつ

かまえて論争したと記されているが、その頃は病氣も大分進んでいて、息切れもひどいようだったが、未熟な学会員に対しても決してこれを見下すことなく論議をしている。

ここにも情熱の人、熱血漢妹尾の面目を知ることができ  
る。

以上、妹尾義郎に関する新らしい資料、しかも晩年のものを紹介したが、恐らく近代宗教史研究者には注目される資料であることを信じて疑わない。

「遺言」を録音テープから原稿に起こすについては、遠藤教温研究員の手をわずらわせたことにここで感謝をささげたい。